

SEVENTH BRAVE

セブンスブレイブ3

チート? NO! もっといいモノさ!

乃塚一翔

nozuka issyou

Illustration: 赤井てら

Samurai



ミマサカ
美作サクラ

18歳。小柄で巨乳の和風美人。
物静かなBL専門の腐女子。

Sniper



ユキシロ クク
雪代九々

18歳。クラス委員。
常識的な感性を持った苦勞人。

Luna Wolf



イヌブシ ヤコウ
戌伏夜行

18歳。本編の主人公。
仮面剣士との戦いで左腕を失う。

主な 登場人物 Main Character

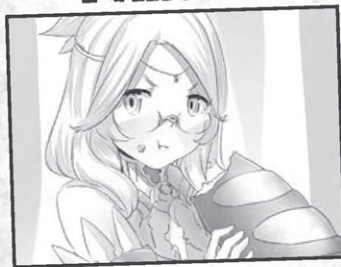
Princess



リスタル=ラ・ヴァナ

21歳。双子の帝国第1皇女。
病気がちで人前にあまり出ない。

Princess



クリュス=ラ・ヴァナ

21歳。双子の帝国第2皇女。
食い意地だけは誰にも負けない。

Machinery General



キシマ チカゲ
鬼島干影

18歳。脳味噌筋肉。
いつも豪快でテンションが高い。

Slayer



ダテ マサチカ
伊達雅近

18歳。夜行の幼馴染。
怠惰なイケメン。頭の良さは本物。

????



ドウサン=アシカガ

魔族の中で指導的役割を務める男。
帝国に間者を送り込むなど暗躍する。

Pharmacist



マレイシャ

16歳。エルフの薬師。
とにかくポジティブな天然少女。

Caesar



ハウロンイン ツツジ
鳳龍院躑躅

18歳。人目を引くお嬢様。
本性は真性のサディスト。

Assassin



ヤナギモト ヘイスケ
柳本平助

18歳。エロスに生きる男。
ブレーキの壊れたスケベ魂を持つ。

ラ・ヴァナ帝国北部、境界砦。

砦内の会議場には、今回の対魔族戦に集った人間側諸国軍の代表が集まり、各々席に着いていた。

森羅衆、ホウライ、モード連合、キヤメロット王国。

彼等はそれぞれ異なる表情を見せながら、時折上座に視線を向け遣る。

ラ・ヴァナ帝国軍の代表が掛けるべきその椅子は、未だ空席だった。

無言の状態が続く室内に満たされる、張り詰めた空気が、それに当てられたのか、控えていたメイドは表情を強張らせ、すっかりと冷めてしまったお茶を取り替えている。

「遅い！ 帝国の指揮官はまだ着かんのか!？」

苛立ちを露わにテーブルを拳で叩いたのは、キヤメロット王国騎士団の紋章を胸に刻んだ鎧を纏う壮年の男。

その剣幕にメイドが肩を震わせながら、深々と頭を下げた。

「も、申し訳ありません！ 先程の連絡では、もうすぐ到着するとのこと……!」

「どれだけ待たせれば気が済むのだ！ 我々はここへ茶を飲みに来たワケではないぞ!!」

怒鳴り散らす男に、萎縮した様子で頭を下げ続けるメイド。

だが、使用人の彼女を責めたところで何も変わらない。

それは自分でも分かっているのだろう。男は苛立たしく鼻を鳴らすと、新しく出された紅茶を一気に啣った。

「あづっ!!」

そして思いのほか熱かったらしく、むせた。

そんな様子を見兼ねてか、口を開く者が1人。

「……落ち着かれよ、王国騎士第3師団長殿。魔族軍が侵攻を始めるまで、まだ2日ある。今からそんな様子では、身が持ちませんぞ?」

集まっている面々の中では恐らく最も年配であろう、森羅衆代表を務める緑衣の老人。

静かな声音で告げた老人の言葉を笑い飛ばし、王国騎士は吐き捨てるように言う。

「ゲホッゲホッ! あー、死ぬかと思った……フン! 魔族共が言ったことを素直に信じるなど、馬鹿げている! 卑劣極まる奴等のこと、今夜にでも夜襲をかけて来るに決まっておる!」

これに対し異論を唱えたのは老人ではなく、1人黙々と剣の手入れをしていた、顔に傷跡のある女性だった。

ホウライ軍代表である彼女は、磨き終えた剣をゆつくりと鞘に戻しながら、淡々と呟く。

「それは、ナイ。過去の記録デ、魔族が自ラの宣言を破ッタこと、一度もナイ。ワタシ、そう記憶してル」

「左様。魔族が真に手段を選ばぬ輩であつたなら、我が国森羅衆は疾うの昔に奴等の手へと落ちていたことでしょう」

難攻不落の天然要塞『エリア大森林』に守られているとはいえ、森羅衆は5大国の中で最も兵力に乏しい。

他国の助けが無ければ魔族と戦うことさえ難しい彼等は、だからこそ魔族の脅威をよく知っているのだ。

「7年前の大戦で、キャメロットは特に多くの兵を失ったと聞く。貴殿の気持ちも分からないではないが、まずは落ち着かれよ」

「指揮官が苛立てバ、兵にもそれが伝わる。気を張り過ぎナイことモ、大事ダ」

「むう……」

森羅衆とホウライの各代表が言うことはもつともで、正しい。

王国騎士の男は自分が少々気負い過ぎていたと省み、やがてゆつくりと頷いた。

「……うむ。確かにそちらの言い分にも一理ある、私は少々余裕が足りなかったらしい」

そう呟いた男の肩から、余分な力が抜ける。それにより眉間に刻まれた深い皺も、心なしか薄くなったように見えた。

彼はメイドに怒鳴ったことを詫^わびると、また新しく紅茶をもらい、ぐいと一気に呷^{すす}るのだった。
「あつづう!?」

会議場に満ちる緊張した空気が、少しだけ和^なやかになってしばらく。
唐突^{とうとつ}に部屋^{へや}の扉^{かど}が開^{ひら}かれると、小柄^{こがら}な人影^{ひとかげ}が中^{うち}へと入^いって来た。

「すみません、遅^{おそ}れました。何^{なん}せ出^で発^{はつ}前に、政務^{せいむ}を押^おし付け——任^{まか}せてきた大臣^{だいじん}が、年^{とし}甲斐^{がひ}も
無^なく駄^だ々^{だだ}をこねてきたもので」

やや早口^{はやぐち}で喋^{しゃべ}りながらも、空席^{くうせき}だった上座^{じやうざ}に掛^かけるその人物^{じんぶつ}。

彼女^{かのう}の顔^{かお}を見た瞬間^{しゅんかん}、各国代表^{こくごくたいひょう}の表情^{へいしやう}に驚^{おどろ}きの色^{いろ}が浮^うかんだ。

「ク、クリュス皇女殿下……!?」

「えっと、わたしは……あ、はい。自己紹介^{じこしやうかい}は要^いりませんか、そうですか。でもこの際^{さい}ですか
らやっちゃいますので悪^{わる}しからず。今回の界境防衛戦^{かいきやうばうゑいせん}で総指揮^{そうしき}を執^とらせて頂^{とう}きます、帝国第2
皇女クリュスⅡラ・ヴァナです。どうぞよろしく」

森羅衆^{しんらしゆ}の老人^{らうじん}が零^{こぼ}した声^{こゑ}に深々^{しんしん}とお辞儀^{じぎ}して、いつも通りの眠^ねそうな口調^{くこう}にて名乗^{なをり}りを済^すま
せるクリュス。

彼女はメイドが紅茶と一緒に出したクッキーを皿^{しら}ごと持ち上げ、ざーっと口^{くち}の中に流^{なが}し込^こ
だ。

「もきゅもきゅ……んくつ。では、わたしの所^せ為^ゐで会議^{かいぎ}が遅^{おそ}れ気味^{きめい}なので、早いところ始めま
しょうか」

「しよ、少々お待ちを！ 帝国皇女である貴女^{きみ}が、何故^{いかん}に戦^{いくさ}の指揮^{しき}など!?」

時間^{じかん}も押^おしているので、スピーディーに話^わを進^{すす}めようとするクリュスだったが、王国騎士^{おうこくきし}の
男^{おとこ}が慌^{あわ}てふためき待^{まち}ったをかける。

仕方^{しかた}のない話^わだろう。

クリュスⅡラ・ヴァナと言えば、人間界^{にんげんかい}でその名^なを知らない者が居^いない程^{ほど}の大物^{だいぶつ}。
病^{やま}に臥^ふせる現皇帝^{げんみへい}クロウスターに代^かわり、今の帝国^{ていこく}を動か^{うごか}す実質^{じしつ}のトップなのだ。
流行^{はやり}り病^{びょう}の鎮静^{ちんせい}、失業者^{しつぎやう}の激減^{げきげん}、大陸^{たいりく}に悪名^{あくめい}を轟^{とどろ}かせた盗賊団^{たうそくだん}の壊滅^{かいめつ}。

その幼子^{おとこ}が如^{ごと}き外見^{がいけん}からは考^{かん}えられないような辣腕^{らつわん}でもって成^なされた功績^{こうせき}は、枚^{まい}挙^{きよ}に暇^{いふ}が無^な
く。

未^みだ帝位^{ていゐ}こそ継^{つぎ}いではないが、それも時間^{じかん}の問題^{もんだい}とまで囁^{ささ}かれる類稀^{るいせい}な為政者^{ゐせいしや}。

既に彼女^{かのう}こそが皇帝^{ていへい}であると考え^{かんが}えせつかちな者^{もの}も、少なくはない。

だからこそ、明^あらかな場違い^{まちがひ}。

彼女^{かのう}がこの戦^{いくさ}いの総指揮^{そうしき}を執^とるなど、タチの悪い冗談^{じやうだん}としか思^{おも}えない。

それはここに居^いる4人の各国代表^{こくごくたいひょう}の、総意^{そうい}であつた。

「……なんですか。皇女^{こうむ}が戦^{いくさ}の指揮^{しき}しちやいけないんですか、差別^{さべつ}ですか」

「いえ、差別とかではなく！ 私はてっきり、武術將軍殿が来るものと！」

不機嫌そうに頬を膨らませていたクリュスだったが、その言葉に納得したのかポンと手を叩いた。

「ああ。そのゴスベルちゃんなら、テスラさんと一緒に帝都の警護へ回ってもらいました。何があるか分からないんで」

「貴女様に何かあるのが一番マズいでしょうが!!」

実質的な国のトップが最前線に出張るなど、聞いたことも無い。

言うなれば、チェスでキングを積極的な攻撃に回すようなもの。途中どれだけ優勢に立とうと、下手を打てば一発で何もかも終わってしまう。

ゲームならそれも笑い話だが、現実なら笑い事でなど済まない。

声を張った王国騎士の男だけではない。

森羅衆の老人も、ホウライの女剣士も。今まで特に口を開かなかったモード連合代表までもが、考え直すべきだと口を揃えた。

しかし――。

「ちよつと、黙っててもらっていいですか？ びーくあいえつと、です」

強い口調ではない。冷たい声音でもない。

けれど有無を言わせないクリュスのひと言で、全員黙らされてしまった。

「て言うか、もしゴスベルちゃんに今回の総指揮を任せていようと、わたしがここへ来ることは変わりませんでしたよ」

――わたしには、義務があるのだから。

彼等はこの世界に何の関わりもない、ましてや本来なら、魔族との戦争になど関わらせるべきでなかった。

自分の、人間族の力不足ゆえに頼るしかなかった。絶るしかなかった異邦人達が、戦いへと赴く姿。

そして――これからひとつ、無理を強いることになる彼等の行く末。どんな結末であろうとも、それらを己の目で見届ける義務があった。

「いいですよ皆さん、入って来て下さい」

部屋の外に向け、ぱんぱんと手を叩きながらクリュスが告げる。

それを合図に、開かれた扉の向こうに人影が現れた。

「ああ、やつとか。立ち疲れて寝るところだった」

そんな、気の入らないだるそうな声と共に、7人の若者達が足を踏み入れてきた。

「……!?!」

突然に姿を見せた、7人の若者達。

彼等の放つ空氣の異質さ。それに最初に気付いたのは、果たして誰だったろうか。

しかし、そんな問いを向けること自体無駄だと思えるくらい、戦いに身を置く者なら一瞬で悟るほど。

その7人は——異質だった。

「ふあ……」

最初に入ってきたのは、欠伸をする眼鏡の青年。

赤い裏地の黒マントではほぼ全身を覆う姿は、まさしく魔法使いを思わせた。

怜悯な雰囲気を持ち、見事に整った容姿からはどこか神経質な印象を受ける。

だが、このような場ですら気だるそうな態度を取っていることから、恐らく内面は正反對の性質を備えているのだろう。

次いで現れたのは、瘦躯な美青年から打って変わって大男。

「がっはははは！ 待ちくたびれたぞ！」

2メートルを優に超える身長と、頑強に膨れ上がった筋肉。

腰に巻いた金属製の厳ついベルトがやけに印象的な、豪快に笑う巨躯の青年だった。

「痛い……50メートルの高さから落ちたよ、俺っち……」

「はしやぎまくって、結局自分で落ちるんだから。バカじゃないの、ホント」

戦いは始まる前だと言うのに、何故か既にひどく負傷している中背の男。

しかし歩き方や重心の置き方は恐ろしく洗練されており、更にそれをパツと見では気付かせない。思わず寒気を感じるような、それほどの練度だった。

彼に後ろから突っ込んだ少女もまた、普通ではない。

艶をたっぷりと含む、肩上で切り揃った美しい黒髪。切れ味さえ持っていそうな、吊り上がった双眸。

首元までファスナーを上げた、ライダースーツのような衣服を着た細い身体は、一見戦闘に不向きとしか思えないが、彼女からは完全に、『狩る側』の空氣が流れ出ていた。

「頑丈ですねえ、柳本君。あんな高い所から落ちたのに」

つばの広い帽子を胸に抱え、つつじ色のドレスに袖を通した美しい少女。

緩やかにウェーブがかかった長い栗毛、優しげに細められた青い瞳。

場に居た4人の代表は今度こそ困惑する。

どう見ても、ただの少女だった。

ただのとひと言で切り捨てるにはもったいない美しさを持っていたが、本当に、それだけ。戦場となるこの場に居ることが、不思議でならない。

それくらい、虫も殺せないような雰囲気を持った少女だった。

「……コートから甘い匂いがする。これ美作さんの移り香か？ 微妙に落ち着かねえ……」
血の色をしたコート。

目深にフードを被った、そこそこの背の高い男。

男の左袖は、二の腕の半ばほどから膨らみが存在しなかった。

乱雑な歩き方をしているのに、足音が不自然なほど小さい。

そしてこの男。各々の目に一瞬——人間以外の、何かに見えた。

「……………」

最後に入ってきたのは、小柄な少女である。

身に纏うは肩を晒すように着こなした、黒地に赤模様の入った上等な着物。

右腰に、身の丈近くある大太刀を佩いている。

鮮やかな赤に彩られた瞳は昏く、けれど澄んでいて、さながら夜に覗く水面を連想させた。

クリュスの後ろへと横並びに立った、7人の青年達。

「紹介します。我が帝国最強の切り札、『セブンスターズ』の皆さんです」

「略してセッターでよろしく。メンバー全員、煙草の吸えない未成年だから」

「それは威厳が無くなるので止めて下さいって言った筈です、マサチカ様」

各国の代表達が訝しげな目を向ける中、クリュスは高らかに宣言した。

「境界付近の魔族軍は総勢3万1千。偵察隊の調査報告によれば、その内先発部隊の数は約1万2千」

人間の軍が魔族に対し確実な勝利を収めるには、状況にもよるが、相手側の10倍近い兵力を

要すると言われる。

つまりこの数は、下手をすれば先発部隊だけで、人間軍10万にも相当する勢力なのだ。

更に、戦場となるのは巨大な橋上。

遮蔽物も何もない完全な平野では、満足に策を弄することすら出来ない。

「その先発部隊に対して、こちらが迎え撃つ数は……」

だからクリュスは、策を何ひとつ打たなかった。

元より彼女は為政者であり、軍人ではない。手の込んだ策など、考えるだけ無駄。

「7人です。魔族軍1万2千を『セブンスターズ』で滅ぼしましょう」

故に、彼女が用意したものはたったふたつ。

ひとつは、勇者7人のみで構成された特殊部隊『セブンスターズ』。

そしてもうひとつは、その部隊がこの上ない活躍を遂げる為の、最高の大舞台だった。

人間が遥か昔より怯え続けてきた魔族への恐怖を絶つ、その剣である彼等が存分に力を振るう為の。

▽

夜行は鞘から引き抜いた『媚嚙』の切っ先を下へと向け、そのまま手放す。

支えを失った脇差は重力のまま落ち、勢いをつけて地面にぶつかる。

切っ先が、やけに甲高い金属音を立て軽く跳ね返った。

「あらら、娼ちゃん^よが刺さらねえわ。硬度が鉄以下のモンなら落としただけで何でも貫くの^{つらぬ}に、マジで硬でえよこの橋」

カラカラと転がる『娼嗟』を拾い上げ、また鞘に戻す。

そんな夜行の仕草^{しぐさ}を横目で見つつ、横に立っていた雅近^{まさちか}が欠伸混じりに呟いた。

「聞くに、大砲の一撃でも傷ひとつ付かんそうだ。外見はただの石にしか見えんが、並の金属より遥かに硬度は高い」

「そいつはすげーや。何が凄いの^{すご}か、イマイチよく分からんけど」

「よおし、いっちょ俺様の拳^{こぶし}で砕いてみるか！」

言うが早い^{はやい}か、そのゴツゴツした拳を振りかぶっていた千影^{ちかげ}を、九々がどこか疲れた声^{こゝろ}で止める。

「こんな時にやめなさいよ……」

そのまま彼女は皺^{しわ}の寄った眉間^{みけん}を指先で揉みほぐし、目を細め、正面の彼方先^{みづ}を見据えた。

「——20キロメートルぐらい先。もう結構近くまで来てるわね、魔族軍」

「や、委員長なんて見えんの？ 俺っちぜんぜん分かんないんだけど」

九々自身が元々生まれ持った人間離れた視力と、狙撃手^{スナイパー}の特性が合わさった結果か。

次に高い視力を持つ平助^{へいすけ}でさえ比較にならない距離を、九々は鮮明^{せんめい}に見渡せる。

そして未だ姿は見えなくても、その気配は感じられるのだろう。

うずうずと身体を揺らしている夜行と、拳を鳴らす千影。

特に夜行は早くも口元を笑みの形へと歪め^{ゆが}させ、時折笑い声ともつかない奇声のようなものを零していた。

「進軍速度はどのくらいだ、委員長」

「数の割に結構速いわね……多分、あと1時間するかしない内には接触^{せつしよく}するわ」

雅近の問いに答えながら、最後の確認とばかりに肩へと担いだ銃のチェックを始める九々。この20分間ほどで、かれこれ3度目になる動作であった。

——本当に神経質な女だな。こいつと付き合う男はきつと苦勞する。

またもひとつ欠伸を重ね、雅近が内心でそう呟いた。

「それにしても、私達7人で1万2千を相手ですかあ」

ふと空を見上げ、いつも通りのふわふわした笑顔で「大変ですねえ」と続いた躑躅^{つづじ}の声。

言葉とは裏腹に、彼女の口調はなんとも落ち着いたものだった。

天は雲ひとつ無い快晴、風もまた穏やか。

いっそ戦いなど忘れてお弁当でも広げ、ピクニックでもしたくなるような行楽日^{こうらくび}より。

「……この戦いが終わったら、私ピクニックするんだあ」

「ッ!? 開戦前のフラグ建てか鳳龍院、ほうろんいんだつたらオレも負けてはいられん! ここはオレに任せて先に行け!」

「いや、私達防衛側だから」

「人は何故フラグを立てるのか！ そこにフラグがあるからだ！」

「天よ地よ、俺たちに力を与えたまえ！　そう、モテモテ王になる為の力を！」

神への祈りか何か知らないが、奇妙な踊りを一心不乱に舞う平助の姿。

かと考えられる。

無論、残りの9割5分は、既に手遅れなレベルの変態性で決まりである。

「うおおおお！ 血が騒ぐ！ 肉が躍る！ 骨が……骨が……骨があああッ！」

「オチを思いつかないなら、血と肉だけで終わらせればいいじゃない！ 最終的に骨折した人

「の叫びみたいになってるわよ!？」

「ああ……もうイヤ、突っ込むの面倒……」

天井知らずのテンションにより、今にも飛び出して行きそうになつて叫ぶ千影と夜行。

そんな彼等の所為で、一気にレッドゾーンまで削られる九々の精神力ゲージ。

どうせ突っ込んでも無視されるし、そろそろやめていいかも知れない。

彼女は割と本気で、そう思い始めていた。

$$\begin{bmatrix} Z \\ Z \\ Z \\ \vdots \end{bmatrix}$$

「……そして、どうしてこの子は立ったまま寝てるのよ」

これから本気の殺し合いが始まると言う時に、野^の太^だ刀^ち『流^{りゅう}桜^{おう}』を支えとして寝息を立てるサクラの姿に、九々は頭痛を起こしそうだった。

余談だが彼女、昨夜ずっとベッドの中でちよつとした掛け算（攻めと受け）の想像をしている

る内、気付けば朝になってしまっていた為、全く寝れなかったらしい。

緊張して眠れなかったとか、断じてそんなカワイイ理由ではなかった。

「ハアア……」

溜息^{ためいき}を吐^ついた九々^{くく}が、自らの極限まで強化された視力^{しりき}で橋向こうを見遣^{みはな}れば、その先には魔族^{まじぞう}と思しき異形^{いぎよう}の者達の軍勢^{ぐんせい}。

武装した歩兵、中型種以上の魔物に騎乗した騎兵、杖を携えた魔導兵……少数だが、空を飛ぶ者の姿もある。

そして今からアレらと戦うにも拘らず、仲間達はこの体たらく。

救いようのない変態と、脳味噌まで筋肉なバカに、脳味噌まで軽くなってるバカ。

死亡フラグを自分で建設している頭のいいバカ、天然お嬢様、立ったまま寝てるなんちゃって花魁。

これで魔族軍に勝てるのか、正直疑わしい。

そんなネガティブ思考に囚われていた彼女の肩へと、不意に小さな手が乗せられた。

「まあまあクク様、元気出して下さい。皆様はやる時になったらやる人達だと、わたし信じてますから」

「……なんで当たり前のようにここに居るのよ、姫様」

彼女が振り向いた先には、眠たげな表情で板チョコを5枚重ねにして食べるクリュスの姿があった。

1時間後には、戦場のど真ん中となるこの場所に。

「細かいこと気にしたら駄目ですクク様。オタクになりますよ」

「大きなお世話よ！ てか砦に戻りなさい！ 今すぐ！」

喚く九々の言葉など聞こえていないとばかりに、その場へピクニックシートを広げ、お弁当

の用意まで始める帝国第2皇女。

今度はバスケットから取り出したドーナツを頬張りながら、力強く宣言した。

「もふもふもふもふもふもふ!!」

「分かるかあッ!! ものを食べながら喋るなッ!!」

恐らくは「わたしは戻りません、ここで全てを見届けます！」的なことでも言ったのだろうが、生憎と口の中にあるドーナツが邪魔立てして、全く伝わらない。

しかも呑み込む端から新しく口に詰め込んでいく為、いつまで経っても話が出来なかった。

——もう駄目だ、私1人の手には負えない。

そう判断した九々は、仲間を頼るべく、半分涙目で振り返った。

「神にも等しきこのオレを、下等生物の力などで殺すことは到底不可能……フハハハハハハハハ！ 仲間達が出るまでもない、このオレ1人で十分！ 下らない魔族共よ、今日が貴様等の命日となるのだ！ ……えっと、あとは何があったか……」

「ゴオオオオオッド！ 俺つちに、俺つちにどうかモテロードへの栄光を！ 女子にキヤーキヤー言われてええええッ!!」

「Zzz……やっぱり、『戌×伊』が鉄板……でも、どっちが攻めかで悩む……」

「ゴハァー……ゴハァー……気が高まる……溢れるぞおッ!!」

「ヒヤハ、ヒヤハハハハハ！ ヒヤーハハハハハハアッ!!」
「戌伏くん、帰ってきて下さーい。言語機能なくなってますよー？ ロシア式修理方法で再起動させちゃいますよー？」

雅近、平助、サクラ、千影、夜行、躑躅……。

こちらもちちらで収拾がつかなくなっており、混沌極まる状況に陥っていた。

天気は雲ひとつ無い快晴の筈なのに、局地的にバカの熱帯低気圧が大荒れである。

ちよっと目を離しただけでも拘らず、この有様。

やはり自分が居ないと、この集団は勢力を拡大して荒れ狂うばかりらしい。

——神様、突っ込み面倒なんて言って本当に御免なさい。

そう、私がやらなきゃ基本的に誰もやらないんだから。唯一例外に近い戌伏君だって、戦場の空気に高揚してあの有様だし。

己の使命を改めて悟った九々は、まるで憑き物が落ちたかのような優しい笑みを浮かべ——
躑躅を除いたバカ6人に、弾丸をお見舞いしてやるのだった。

「じゃあ、姫様はこっちで引き取りますんで。勇者様方にはご迷惑おかけしました、ホントに」
ビシッと敬礼し、目を回して気絶しているクリュスの襟首を掴み、引き摺っていく帝国兵士。

「せめて戦いの最中だけでも余計なことしないように見張って下さい」

それを見送る九々の後ろにもまた、それぞれ痛みに震えて自分の頭を押さえる仲間の姿があった。

「ぐ、ううう……これが、死亡フラグを立て続けた者の報いか……!」

「違うから。バカなことやってた報いだから」

魔銃の銃床を地面に叩きつけ、鋭い眼差しで全員を見据える九々。

特に悪いことはしていなかった為、彼女の仕置きを免れていた躑躅以外の面々が、その眼光に怯えを見せる。

「そ、そうカリカリしなさんなって委員長……ホラ、可愛いお顔がなんか怖くなっちゃってるっしょ?」

「シヤラップ! 黙りなさい、このハイエナ系男子。モテたいならまず常識を学べ、変態覗き魔」

「ぬがあっ!」

言い方は酷いが、なんとも至極まっとうな意見だった。

シヨックを受けた様子の平助は驚愕の表情で固まり、そのまま動かなくなる。

そんな彼から視線を外すと、九々は銃口でもって巨大な橋の先を指し示した。

「見なさい。アンタ達がバカやってる間に、お客さんの御到着よ」

示されるまま夜行達がそちらを見遣れば、橋向こうから人間界へと進軍する無数の影が、未

だ遠くも、彼等の目に見える距離まで迫っていた。

「進軍速度からして、接触まであと15分ってトコね。いい加減に心を入れ替えなさい」

彼等7人の1キロほど後方に配置された兵士達も、その存在に気付き始めたらしい。

切迫した緊張感が、徐々に後ろから伝わってくる。

「……そうだな。おふざけパートはここで終了だ」

静かに呟いた雅近の目から、気だるげな雰囲気が消え、他の面々もまた、各々臨戦態勢に入る。

「雪代……敵の、数は？」

「事前の報告にあった通りね、1万ちよいつてトコ。視認できる限りじゃ、大体半分が獣人。

3割くらいがダークエルフで、後は魔物かしら」

「……フン。やはり、全て魔族もどきか」

獣人。そして、ダークエルフ。

種別こそ魔族に区分されているが、この2種族は厳密に言えば魔族ではない。

魔族とは、人間が魔物化したことで生まれた突然変異種を指す。

種として定着した後も、大陸の最北部に位置する小国でしか生まれない。

まるでその個体数に反比例するかのような形で、魔族は絶大な力を持って生まれてくる。

——500年前。たった数千の軍勢にて『魔界』の2大国だった『獣国』と『エルフビレッジ』を同時に落としたほどの、凄まじい力があつた。

そしてその頃から、大陸北部は総じて『魔界』と称されるようになり、魔族の配下に堕ちた獣人とエルフもまた、同じように魔族として区分されるようになった。

「つまり——」

「ええい！ 小難しい話など分からんし、どうでもいい！ 要するにあの連中程度は軽く倒せなければ、本物の魔族とサシでやり合うなど到底できん！ そういうことだろう!?」

「……ほう。バカにしては珍しく、核心を突いたじゃないか鬼島。つまり要約するとそうだ」

魔族軍……否、魔族もどき軍1万2千。

確かに人間と比べれば強い力を持った2種族に加え、飼い慣らされた魔物を含めた混合軍。強敵であることには、なんら変わりない。

だが——。

「ここで躓くようでは、姫君が大概叩いてオレ達を召喚したのが無意味になる。報酬もそうだが、一応世話になってる身としては、通すべき義理もまたあるだろう」

魔本を取り出し、吹く風でばらばらとページを捲る雅近。

「俺様達7人だけで魔族と渡り合うなど無理だ、不可能だとはざいた他国の連中にも、このまま舐められつ放しは御免だな！」

鎧を変形させたベルトを淡く発光させ、いつでも元の形へと戻せるよう構えた千影。

「いいじゃない、別に。今の内だけでも、好きに言わせてあげれば」

どうせ——すぐに意見を、覆すことになるんだから。

静かに言葉を紡ぎ、『流桜』を鞘から抜き放ち、その刀身から幾重にも桜花を散らすサクラ。

「ヒヤハッ！ いいんだなもう、レッツパァリイしてもさアッ！」

「クスッ……でも戊伏君の場合、独眼竜じゃなくて独腕竜になりますけど」

「どっちでもいいよオ！ とにかくパァリイしたいんだよ俺はアッ！」

後ろ腰から『娼啜』を抜き、片手で器用に回し、ステップを踏む夜行。

そんな彼を、楽しげな目で見つめる躑躅。

フリーズから復活した平助が、フツと似合いもしない決め顔でアホなことをのたまう。

「カムヒアー・俺・ザ・モテロード……この戦いが終わった時、俺たちは数多の美女美少女からキァーキァー言われることだろう」

「夢物語も大概にしなさい。アンタに向けられるのは精々、黄色い歓声じゃなくて侮蔑の悲鳴よ」完全にマイワールドへと入っているのか、九々の辛辣な言葉も聞こえていない様子だった。

「——さて。じゃあまず、開幕ついでに下派手な花火でも上げるか」

そう呟き、魔本片手に数歩前へと出る雅近。

射程距離や攻撃の威力などを考えれば、確かに一番手は彼こそが相応しい。

「何せ数が数だ。下手に時間をかけて梃子摺っているなどと思われるのは、極めて心外」

雅近は口角を吊り上げ、減多に見せることの無い笑みを浮かべた。『攻撃への予備動作』だ

と思わせるような、凶悪な笑みだった。

「それに、ダラダラと長引かせるのも面倒だ。まずはそうだな……連中を取り敢えず、半分以下に削るとでもしよう」

「『術式開示』」

雅近の手にしていた魔本が、ふわりと宙に浮かぶ。

ページが、触れられもせずに凄まじい勢いで捲られていく。

やがて弾かれるかの如く、ページの1枚1枚が魔本から切り離され、瞬く間に、無数の紙の群れとなって雅近を取り囲んだ。

「この魔本『グリモア』には、世界開闢以来より編み出されてきた全ての魔法と、その術式が仔細に記されている」

仲間達が彼の行いを黙って見据える中、雅近は誰ともなしに呟く。

「効果がほぼ重複するもの、下位互換や上位互換でしかないもの。それら全てを含めれば、魔法の種類は数千以上にも及ぶ」

構成する術式に至っては、更にその数倍。

如何に雅近が天才だとしても、その全てを記憶するのは面倒だった。

「だからこうして、覚える必要が無いよう魔本を持ち歩いている」

そう言葉を続けると、自分の周囲に浮かぶページの1枚を手に取った。

「何せオレのクラス技能のひとつである『術式合成』は、まず術式そのものを知らなければ話にならないのだからな」

電話帳並みの薄い紙切れ、紙面にびっしりと書き込まれた極小の文字列。

夜行や千影辺りなら1分で頭痛を起こすだろうそれに、雅近が素早く目を通す。

「ああ、これは使えそうだ」

無数の文字列の中にあつた一文を左手の指先でなぞると、翳した右手の上に、魔力で模られた同じ文章が浮かび上がった。

そして用済みとなったページを手放せば、切り離された本の中へ、何事もなかったかのように戻っていく。

ページを取っては記された術式をひとつかふたつなぞり上げ、右手に同じ物をコピーする。読み終えたページは本の中へと戻り、またページを取る。

そんな焼き回しが、1分近く続いただろうか。

気付けば30ほどの文章列が雅近の掌上で球体のように絡み合い、1個の完成された文になっていた。

「こんなところか」

そんな呟きと共に、残っていたページも全て吸い込まれるかのように魔本へと戻る。

本はそのまま勝手に閉じ、欠伸中の雅近の左手に収まった。

「そろそろ、初期設定では眼鏡をかけていたが、オレと姫君が既に眼鏡キャラと決まっていた為、急遽変更になった委員長辺りから質問が来そうだから、先んじて答えておこう」

「何メタ発言をしてるのよ伊達君……」

魔本を懷に収めながら、振り返る雅近。

訝しげに首を傾げる九々を含めた6人の視線が、彼の右手にある魔力の球体へと注がれた。

「こいつは今作った、対軍用の殲滅魔法だ。何せオレの習得魔法には、数千の軍勢を消し炭に出来るほどのものなどまだ無いからな」

『セブンスターズ』で魔法を扱えるのは雅近だけなので、彼の発言に対し、驚きを見せる者は居なかった。

しかしもしまだここにクリュスあたりが残っていたなら、彼の言葉がどれだけ異常なものであるかを理解できたことだろう。

雅近が成したことは、謂わば新魔法の創造。

無数に存在する術式の中から最適なものを選び出し、複雑な計算を幾度も繰り返し、綿密に組み上げる。

それは数多の魔法使い達が束となっても、中々成し遂げられることではない。

確かに雅近は、組み替えの工程を大幅に省くことが可能な技能『術式合成』を持っている。だが、短縮化されるのは『組み上げた術式を繋ぎ合わせる』ことのみ。

並べた複数の術式をひとつに結び、魔法として組み替える。特殊な触媒と儀式を必要とするその最終工程を、省略できるだけ。

ひとつでも術式を組む順序が違えば、予定とは全く異なる効果にしかない。僅かでも矛盾があれば、魔法が発動しないばかりか暴走さえ引き起こす。

危険極まる、だからこそ緻密な計算が何よりも重要視される魔法創造なのだ。それをたった1分少々で、彼は行ってしまった。

「自分で作れば、技能のマスタリーレベルなど無視できる。丁度いいのがないなら、1から作ってしまえばいいじゃない」

「随分と過激派なアントワネットさんが、脳内に住んでますねえ……」

躑躅達はそんなことなど知らない為、雅近の行いも「そんなもんなのか」ぐらいにしか思わなかった。

けれどそれも仕方ない。当人ですら「便利」のひと言で済む程度の感慨しか、持っていないのだから。

「さて、そろそろ屠るとしよう……ついでに」

術式を載せた右手が、天へと高く掲げられた。

雅近は着実に迫り来る大軍を見据え、再び笑みを浮かべる。

「尻尾を巻いて逃げられんよう、退路も一緒に断っておくか」

――ぐしゃり。

握った右手で、組み上げた術式を潰し、砕く。

弾けるように展開されたのは、雅近の魔力を吸い上げる幾重もの魔法陣。

耳の奥に響くような高音が一瞬、周囲に響き渡った。

▽

『巨橋ゴリアテ』の上を、魔族達は勇み進軍していた。

橋の先に見えるのは巨大な砦と、そこに待ち受ける人間の兵士達。

魔族軍1万2千の先遣隊、その10倍以上にも及ぶだろう軍勢である。

しかし魔族側に、恐怖や怯みなど存在していなかった。

人間は脆弱だ。数こそ多いが、なんとも弱々しい生き物だ。

弱者でありながらも同じ種族間でさえ争うような、下らない連中だ。

前方を往く主に獣人で構成された前衛部隊には、既に関の声を張り上げる者の姿さえあった。

紛れもなく寡兵であるにも拘らず、士気は極めて高い。

己達の敗北など、考えてさえいなかった。

そんな中で、異常に気付くことが出来た者は、どれだけ居ただろうか。